
魔物が大人しくなった訳。

時雨水氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔物が大人しくなった訳。

【Nコード】

N9100X

【作者名】

時雨水氷

【あらすじ】

皆様お早うございます、千尋と申します。目覚めた時には、いつの間にか見目麗しい男性となっておりました。さらに半竜にもなっている上、周りの魔物っぽい方々からは主とあがめられております。よく分かりませんが…責任は、取りますか。

チートですが、能力を使う場面など皆無な日常物語。巢でのだーりしたり、町に出てみたり、兵士相手に悪戯を仕掛けて子供達ともども怒られたり。そんなお話。

魔王見習い様の優雅な一日。(前書き)

改：言い回しその他もろもろ。

中身は欠片も変わってません。

魔王見習い様の優雅な一日。

暗い、暗い洞窟の中。

その奥の奥の、最下層。

壁には淡く光る鉱石が、床には苔が敷き詰められたその部屋の、一番奥の、奥の壁。

そこには、ひととき大きな、血の色にも似た宝石が埋め込まれていた。それは濁っていて中は見えなかったが、人一人なら余裕で入れるぐらいに巨大であり、もし部屋にたどり着いた者がいれば一瞬呆けてしまうほどそれがある部屋は暖かった。特にこの、凍える大地においては。

ぴきり。

音が鳴り、紅の宝石にヒビが入った。

ぴきり。　…ぴき、ぱし、ぴきぴきぴきぴき。

一つヒビが入るとまるで決壊したダムのように崩壊の歌は響き始めた。

そして最後の一つが鳴り終わると、一瞬静寂が訪れた後にその宝石は砕け散った。中からは紅の液体があふれ出してきたが、それは空気に触れる傍から洞窟をまぶしく照らし出す大きな焰に己の姿を変えていった。

その最中で、どさりと音がした。

コケのおかげで怪我はなさそうではあるが、紅の宝石があった場所の前で気を失っているその青年。真っ黒い、長い長い後ろ髪および顎まで届く前髪と、今は伏せられている闇色の瞳。頭から生えている二本の立派な角と、手触りが良さそうな毛が生えた漆黒の竜のような太もも、両足と尻尾。背から生えている、これまた黒いこうもりの羽。それら全てを引き立たせる、きめ細やかな白い肌。その部屋の中央からじわじわと湧き出している赤い液体に守られ、幸せそうに上下しているその胸には、閉じた瞳の形を模した文様が描かれていた。

皆様、お早うございます。

私、千尋と申します。

なぜか起きた時には、地中深くの洞窟にて、男性の姿で真っ赤な温泉に浸かっていました。

出るのが大変でした。

服や道具、武器などは洞窟内で死んでおられた方々の遺品を洗って使わせていただいております。

弔いはしたので、大丈夫：なはず、です。

そして今も浸かっています。

己の事ながら、飽きる気配すらありません。

もう何年も使っているんですけどね。

しかしそんな事はどうでもよいのです。

私は大往生をしたはずなのに、生きている事のほうが問題です。

しかも見目麗しい男になっております。

邪魔な髪を三つ編みにして上で纏め上げ、真っ白いうなじを晒した姿は、己の事ながら見られてしまいました。

閑話休題。

『主様ー』

『ぬししゃまー』

『ぱぱー』

『主さまあ』

若干一人だけおかしな呼び名をしてきておりますが、もう慣れました。てちてちてちと複数の足音がしたと思うと鳴り響いた水音と同時に、四つつの毛玉が猛然とこっちに向かってきているのが見て取れます。最近ようやく子を生んだ、狼系の魔物の四つ子達です。

と、再びかすかにこちらに向かって走っている音が聞こえました。
足音がする所からして、恐らくは長男くんでしょう。親御さん方は心配すら押し殺せるので、足音なんてたてやしません。

：ほら、その通りです。姿が見えました。」

私の体によじ登っている子供達を見て、叫びだしそうな表情を一瞬作りましたがそこはそれ、ちゃんと自制できるすばらしい子です。

『ぬ、主様！ 申し訳ございません！ ただいま引き取りに参りますので…』

「かまわん。それよりどうだ、お前も入らぬか？」

手を差しのべながら、優しく笑う。

え、中身と違いすぎるって？ …実は私、ファンタジー系が好きな物で。魔王にでもなったのかと思い、楽しくてそれなりの言動をしていたらますますそう見られるようになってしまったので、いまさら変えられるような状況ではなくなってしまうていたのです。最近は慣れてきたので、別にいいんですけどね。

『い、いえ、そんな恐れ多い事…』

いやしかし、恥じる子犬というのはなんと可愛い事か。思わずなでくり回したくなります。四つ子達には毎日やってるんですけどね。

「そうか…残念だ。」

『ごんねんだー』

『残念！』

『残念ねー』

『…すー』

どうやら、頭を陣取っている子は寝ているようです。起こさないように極力動かない事にしましょうか。それよりも、落ち込んだ表情を作ると、長男くんが動揺しました。いつもの事なので、いい加減演技だという事を気づいても良い頃だとは思うのですがね。

「…一緒に入りたかったんだがな…」

深いため息をつく。起きている三匹も瞳をウルウルさせています。らすとぷっしゅです。

『わ…わかり、ました。』

耳を伏せて尻尾を垂らしました。 我らの勝利です。 彼らには後で干し肉をあげましょう。

全員十分に温まった所で、地表に出る事にしました。 基本的な生活は、山の上に打ち捨てられているちよっとボロくさい城というか

館というか、とりあえずそんな感じの所を占拠し営んでおります。かなり巨大です。作りが良いのかほころびは無く、隙間風もありません。一通りの生活用品も放棄されていました。なんて幸運なのでしょう。

火は薪を割って使うそうです。前の私ならば無理だったでしょうが、今の私は人間ですらない成竜男性。置いてあった大きめの斧さえ軽々と持てました。

火種は簡単です。魔法を使えばいいのです。なぜなら、慕ってくれている魔物達によると私は炎属性だからなのです。サバイバルやキャンプには便利すぎる能力です。

ぱちつと指を鳴らすと、かまどに入れた薪にぽつと火が点りました。ライター要らず。四つ子と長男くんは居間の暖炉の前でもふもふしているでしょう。ここの絨毯は全て毛足の長い、良い物ですからね。

ちなみになぜ彼らがここに居るのかというと、ここに住んでいるからです。というか、住める大きさの方々は全員移住しました。寒い場所を住处とする魔物といえど、やはりあったかいほうがいいらしいです。それでも部屋がたっぷり余っているので、この城の大きさは半端ではありません。

ただ、ある白銀の巨大なドラゴンさんは、思案した後に私みたいな半竜に姿を変えて住み着きました。しかも、やろうと思えば完全に人型になれるそうです。さすがファンタジー小説の最強種族。なんでもあります。

食物は、私と子供達以外が交代で狩に行っています。子供達には

無理だし、私はここを外敵から守る立場だから、と言われて。　：　こんな吹雪が万年吹きすさび、クレバスがそこかしこに罌を張っている辺鄙な場所に、どんな敵がくるのかは分かりませんが。

とにかく、今やる事は、子供達の食事。　大人たちは放置でも問題ありませんが、子供には美味しいものを食べさせるべきなので、彼らの食事と親御さんがいない間の子守りは私が担当する事になりました。　子の危険に気を配らなくても良いので本気で狩が出来る、と親御さんからは感謝されているのが嬉しいです。　他にも妊娠した方々が三組ほど出てきているので、ゆくゆくはその子供達の面倒も見ることになるでしょう。

そうなれば可愛いパラダイスです。　天国です。　今から待ち遠しいです。

火が十分温まったのを見て、フライパンを火にかけ、油をひいて投入しました。　今日は薄切り肉とピーマンの炒め物です。　良い香りです。　ゴマが無いのが悔やまれます。

しかし、犬系や猫系の魔物にも玉葱系を食べさせていいのには驚きました。　普通の犬や猫だったら中毒で死ぬんですが、魔物は色々と勝手が違うそうです。　人間にとって毒となるような物でも食べていたのを見た事があります。　私は怖くて無理なんですけどね。

そうそう、塩や油などは、ドラゴンさんが調達してきてくれています。　ついでに新品の服や生活用品なども。　基本的にはドラゴンさんの指南の下、私が軽い魔法を込めた道具を作り、彼がそれを売ったそのお金で色々買ってきて貰っているのです。　私も行きたいのですが、人型になれない内はダメと言われました。　しかしお菓

子やおもちややらを買ってきてくださいますし、残ったお金はもちろん貯蓄へと廻しておりますので、あまり困らせるような事は言わないようにする事に決めました。

：それはそれとして、さっきから後ろでドラゴンさんの気配がします。じっと見つめてきているようです。振り返ると案の定、綺麗な銀髪と切れ長の銀目を持った長身イケメンさんが、真剣にこちらを：というか、このフライパンの中身を見つめています。

「：もう少しで、出来ますから。」

苦笑気味にそういうと、ぱああっと花が綻ぶ様に笑顔を見せるドラゴンさん。無口は直して欲しいです。しかし、あちらは己より上だというのに、可愛すぎてつい笑い込んでしまいます。さすが美味しいものが大好きと公言するだけの事があります。まあ、それなりの教養も受けておりますし、人間は手先が器用ですからね。

こんな魔物しか居ない所では、人の料理もそうそう食べればしないでしょう。

いそいそとテーブルに二人分の食器と、五つの深皿をだすドラゴンさん。彼には私の前の事も含め、色々と理解してもらっている協力者なのですが、胃袋で釣っている気がしなくも無いです。どうすればよいのでしょうか。そんな事より味付けも終わったので、きちんと量を考えて取り分けます。子供達にはこれで十分ですが、私達にはこれにサラダと軽いスープが付いてきます。：我ながら、美味しくできました。

昼食をとり、無駄に広い中庭に遊びに行った四つ子達。メインの通路やリビングを在住中の方々と一緒に掃除しました。ちよくちよく子供達の様子を見に行きつつ、最後に自分の部屋を掃除します。

私の部屋は、この城の最上階。一室丸ごと部屋になっており、個人的にきれいにきれいにしたそのワインのような赤色の絨毯と白い壁を持った部屋は、私以外立ち入り禁止になっています。もちろん靴は厳禁です。靴を履かない方は拭かなければなりません。私のように。

奥のほうにはとても広く、大きなベッドがあり、二対のソファ、その合間においてあるローテーブル、扉から入って左手にある個人用の風呂場が見て取れます。さらに、壁が見えないほどのたくさんの本棚と無数の本。たつぷりと陽光を取り入れられる、大きな出窓。その窓の一つに作られた、クッションと毛布がゴチャつとしている簡易寝床。昨日飲んだお茶の残骸がのっている、アンティーク調の重圧なテーブルと椅子。

ちゃっちゃと掃除します。いくら私といえど、ここからすぐには駆けつけられませんし。中庭から出ないように結界は張っているんですけどね。

子供達が泥んこになって帰ってきた時には、もう日も暮れかけていました。今日はハンバーグですが、先に風呂に入れる事にしました。きちんと体を洗わせた後に、あらかじめ湯を張っていた湯船に放り込みます。しかし、お兄ちゃんというのはすごいですね。

皆が長男くんの言う事をちゃんと聞いています。

夕飯は冬野菜と何かの肉の煮込み物。残り物は早い者勝ちの争奪戦になるので、興味の無い者はさっさとキッチンを離れるのが得策です。

夕食後は、居間でドラゴンさんに通貨の形態、この世界の常識や歴史などを聞く勉強タイムです。人間の言葉と文字はちよつとてこずりましたが、何とか形になりました。そして何故こんな事をするのかという事に関して、ドラゴンさんはこう言い放ちました。

「魔王たるもの、多少の教養は持っているべきだ。」　：と。

：別に魔王になりたいという訳ではないんですが、大人しく授業を受けています。知識は財産ですし、今までこのエリアも支配していた魔王様は傲慢で鬼畜な方だったそうです。人間魔物関係なく、生かさず殺さずを地で行っていらっしゃったそうです。でも、この海に近いエリアはすでに私が生まれた事で「私の縄張り」となり、だれも前王の言う事を聞く必要がなくなっただけです。攻め込まれたりして私が殺されると以前の状態に戻るそうですが、ドラゴンさんいわく私ならばおおむね簡単に返り討ちにできるらしいです。

とりあえず、あんな可愛い子達を虐待していたというその前王は許せん。統治方法は私が決めれるというので、第一段階として前王の縄張りにだけ、物資の流通をストップさせるようにドラゴンさんをお願いしました。私がこのエリアを取っちゃった事で海に面する部分がなくなりましたし、地味に効くでしょうね。

さらに、一般市民の受け入れは比較的緩めに。前王の縄張り以外で発行された通行手形を持っている方々は、殆どノーマークで。

スパイも悪い方々も入ってくるでしょうが、目に余るようになったら殲滅すれば良いだけです。基本的に自治させる気ですからね。ある程度は規制しますけど。

また、スパイ関連などの頭を使う事柄は全て人間に任せることにしました。ただ、ドラゴンさんには人間を上層部に置くのははじめ

て聞いたといわれ、驚かれました。

権力は変わらずこっちが持っていればいい。ただ、知恵を武器とする人間は、そういう事が得意だからほっといても大丈夫なので、その分魔物や魔族達は楽が出来ますし、衣食住と安全、そしてある程度の自由と働きに見合った報酬を保障すれば、殆どが心の底から仕えてくれる有用な財産なんですよ。人間って。

…そう答えると、どういう事だと城に詰め寄ってきていた縄張り内の権力者の皆様は納得してくださり、さっそく急ぎ足で帰っていただきました。やっぱり誰しも楽できる所は楽したいですね。その後に貰った報告書によると、大体の場所が私の想定より上手く回っているらしいです。良い事です。

ああそう、私はどうやら魔王「見習い」だそうです。胸にある瞳の文様が目を開いたら、魔王として成人(?)した事になるそうです。この状態で他の魔王に仕えたりすると、覚醒する事はない代わりに「側近」というサポート系に変化するそうです。

とりあえず、ドラゴンさんは他の魔物達と違って、ちゃんと言葉を発して喋ってくれるので聞きやすいことこの上ないのが嬉しいです。声が綺麗なテノールだという事もプラスでしょう。

居間の暖炉の前で遊んでいた子供達が寝た二時後。今日のところのお勉強は終了し、それぞれの部屋に向かいます。

夕食を作っている合間に入れておいた火のおかげでとてもあったかくなっているその部屋は、疲れた私の体をゆるりと夢の世界に引きずり込もうとします。それに抗ってさっと体を洗い、着替えて寢床に突撃しました。誰も見ていないので、演技をする必要も

なく本能のままに毛布にもぐもぐともぐりこんでごろごろしました。
ああなんて気持ちがいい。

—ここは私の家で、私の巣。

その事実にも今日も至上の喜びが湧き上がるのを感じながら、私は眠りについたのでした。

魔王見習い様の優雅な一日。(後書き)

※もしも誤字脱字、おかしい言い回しが目に付いた際は、どうかお気軽にご一報ください。 お願いします。

追記.. ちょっと読みやすく改変しました。

ちなみに、「側近」属性は、「魔王」に仕えるのをやめれば取れます。 その時点で、覚醒条件（人によって違う）を満たしていれば、即「魔王」となります。

魔王見習い様と遭難者くん。 (前書き)

改変..

あちこち、読みやすくを念頭において付けたり消したり。
ストーリーは変わってません。

メイン

魔王見習い様と遭難者くん。

皆様こんにちは。 千尋です。

突然ですが、遭難してしまったと思われる方を発見してしまいました。

散歩に出たのは気まぐれですが、いわゆる神のお導きという奴でしょうか。 雪に覆われたこの大地、このままほっておいたら確実に死亡していたでしょうね。

：見たところ、人間です。 耳が丸っこいし、小さくて、筋肉もそれほどありません。

さらに言うと、大人になりきっていない青年です。

綺麗な短い金髪と、ぼろぼろの服。 傷だらけの体。 強い光の力を感じる事からして、「勇者」と呼ばれる固体である事は間違いなさそうではありますが、どうにも今まで大事にされてきたとは言い難い風貌をしていらっしやいます。

見捨てるのは良心がとがめますので、優しく抱き上げて城まで運ぶ事にしました。 私の周りは常にあったかいので安心したのででしょう、体を摺り寄せてきました。 可愛い子です。

余所者を連れて帰ってきた事で城の中は一瞬で野次馬モードに切り替わりましたが、私の威嚇を耐えてまで近づこうとする子は居ないので、別段問題もなく湯浴みと休息を取らせる事ができました。

命の危険も無いようですし、癒しの術を使ったらおそらく怒られるでしょう。なので治療は薬を塗って包帯を巻いただけにとどめてあります。とても痛そうで、私の心が痛いです。

そういえば、猫の喉を鳴らす行為には癒し効果があると聞いた事があります。小さい猫系の魔物の一匹におねだりしてみると案外あっさり良いよと言ってくれました。その代わり今日一緒に寝て欲しいそうです。もちろん心の底から了承しました。ついでに大型の魔物の一人に警備をお願いします。騒がれたらあの子が起きてしまいますしね。

で、その合間にお粥を作ります。この大地の気候は元居た場所に似ているので、食べ物もまあまあ似通っているのです、お米らしきものがあつたのです。ただ、どちらかというとタイ米と日本米を足して二で割ったような物ですけどね。

それはそれとして、大きな鍋にたっぷり出汁をとってから、あらかじめ洗って水を吸わせておいた米をたくさん入れます。かるーく塩を入れて、後は蓋を被せてから弱火で放置です。炊き上がったものからやるほうが簡単なんです、子供には美味しいものを食べさせたいのでまともなやり方でやります。ちなみになんでこんなに多く作るのかというと、病人が食べたいだけ食べさせるのがマナーだからです。本来ならば多すぎてもダメなのですが、この場合は飢えてそうなのであえて大目に作りました。

洗い物をしてると、あの子が起きたとの報告を受けました。エプ

ロンははずしてもいいんですが、めんどくさいので付けたまま行きます。　：ああ、酷く興奮してらっしゃる。　怪我に障るので落ちて欲しいのですが：まあ、そりゃそうですね。　魔物の巢の真っ只中ですもんね。　私の縄張りに住んでるわけでもないようですし、こちらの事情を知ってる訳ありませんよね。

まあ、それでは人間の言語の初披露と行きましょうか。

「：目が覚めたか。　気分はどうだ？」

あ、なんか信じられない物を見たとても言いたげに見つめられています。　皆さんが私に向かって主言っているので私がこの主だという事は分かったらしいですが、私がエプロン付けているのがそんなに変ですか。　：変、なんでしょうね。　権力者の皆様も驚いていらっしゃいましたし。

まあ良いでしょう。　毒気を抜かれたのかなんなのか、普通に受け答えしてくれましたし、言葉も通じているようです。　お粥が出来上がるまでの間限定ですが、暇を持て余したわんこ達のお話にも付き合ってくれます。　なんていい子。

ドラゴンさんが帰って来たときには、彼はお粥を全部平らげた後に急遽作ったサラダも完食して、ぐっすり眠りの世界に浸っていました。　人払いをし、ドラゴンさんは彼を見た後、私を見て一言。

「…で、どうする気だ？」

「えっとですね、回復するまではここで療養させようと思ってます。その間に情報を聞きだして、しかるべき処置をした後にどこかの町に向かわせようかと。」

「こいつがここに居たいといったら？」

「子守り要員が一人増える事になりますねえ。」

「…こいつは、信じて良いんだな？」

「え？ ええ、たぶん。私はあまりそういう事を見抜くのは得意じゃありませんが。」

「いや、主様がそう思うのならそうなんだろう。私も信じよう。」

「はあ…そうですか。」

よく分からないままに、今日が終了しました。夜ご飯は久々に餃子です。皮は私の手作りなのでもちもちで美味しいです。

次の日、彼の傷は殆ど消えていました。さすが勇者。でも、最低あと三日は無茶させませんけどね！

話を聞くに、この隣にある国に自分の国のお姫様が誘拐されそうになったというありがちなお話でした。ただ、その魔王様は、

「姫を差し出すのが嫌ならば勇者を差し出せ」と言ったとの事です。で、あまり思慮深くない王様は、周りの静止も聞かずに齡15の彼を差し出し、そのまま彼の国は滅ぼされ、結局姫は娶られたと。アホです。

しかし、彼はそこではそれほど酷い待遇を受けてはいなかったんですね。私も聞きかじったのですが、その国は良くも悪くも実力主義なので、魔物相手でなくともトップクラスの实力を持つ勇者は可愛がられていたほうだと。特に姫の信頼が大きかったらしいです。風貌に似合わず（と言っては失礼ですが）、その魔王様は姫に首ったけとの事なので。

（なんでも怪我を負って森で休んでいた所に、姫様が来て献身的に介抱してくれたとか。何その少女マンガ。）

…でも、そこから全てが狂い始めたと。

さらに隣の国の王様が横恋慕してしまったのです。ええ、何を言おうとたった二町程度（しかも小規模）しか支配できない王など、普通は歯牙にもかけられないのですが。運の悪い事に以前このエリアを支配していた前王もその姫に横恋慕したらしく、なんと手伝おうかと言ってしまったのです。

姫とその夫は命からがら逃げ出し、この大陸で一番大きな国、霧火国の王に助けを求めに行きました。しかし彼らを逃がすために防衛線を張っていたこの青年と兵士達は、捕らえられて牢獄に放り込まれた後、人を人とも思わぬ扱いを受けていたそうです。そして

五日ほど前、何度目かの炭鉱送りになった時、そこにいた全員が結託して彼を逃がしてくれたと。そんな事をする、どんな仕打ちを受けるか知らないはずは無いのに。

そしてそのまま、彼らが言った一言「待ってるからな!」という言葉葉を胸に秘めてここまで来たそうです。

…つくづく、あの日いきなり散歩に出たくなって良かったと思います。ここ、マテラ大陸のほうには神々すら葬れる神無という種族がたくさん住み着いているせいか、あまり彼らも来ないのですが（この城にもいつの間にか五人ほど住んでいたのにはびっくりしました）、今回ばかりは特別だったのでしょう。なんせ「勇者」ですから。

ここからはドラゴンさんの話になりますが、ご夫婦は無事霧火国にたどり着き、今はその王ともども武力行使の準備を整えてるらしいです。青年はそれを聞いて心底安心したように、ベッドに沈み込みました。

「ならば、その戦争が終わるまでここに居るといい。あちらには私から連絡しておこう。」

弾かれたように顔を上げ、伺うように顔を見る青年。

「い…いいのか?」

「ああ、部屋も余っているからな。ただ、働いてはもらうぞ。」

「もちろんだ。何をすればいい?」

「まず、お前の料理の腕はどれくらいだ？」

「え…？ 料理？」

「料理。」

顔を縦に振る私。

「料理…まあ、普通…かな？」

ぱんっと一度手を叩き、歯を見せて笑った。 少し怯えられたが、嬉しいのだからしょうがありません。

「宜しい、パーフェクトだ。 ならば今から手伝ってもらうぞ。」

「い、今?!」

「ああ、人手はあったほうが楽だ。 ほらもう傷もあまり痛まないのだろう、さっさと立て。 子供達の腹を空かせる訳にはいかん。」

腕を引っ張ってベッドから引きずりだします。 しょうがないのです、もう時間と勝負なのです。 特に子供達が爆発的に増えた今となっては。 一応比較的手先が器用な大人達を駆り出してはいるのですが、おっつきません。

…とは言っても、全員神無族ですけどね。 姿は人間そのものなので、完全に魔物な方々とは器用さの度合いが違います。

「い、こど…って、ちょっ！」

さっさと靴を履かせて肩に担ぎ、勇み足で厨房に向かいます。 ド
ラゴンさんは何も言わずに後ろを付いてきます。

途中から呆然としていた青年が、リビングにて寄ってきた子供達を
見た瞬間に苦笑して諦めモードになったのを感じました。 ええ、
あんなに多くのきらきらした目で見つめられれば、がんばるしかあ
りませんよね。

その後、連絡を受けた姫様が全て放棄してすっ飛んできた上、夫の
みならず霧火国の王まで引き連れてきたのは、また別のお話。

魔王見習い様と遭難者くん。(後書き)

「魔王見習い」は通常、「魔王」からは嫌われています。自分の縄張りが脅かされてるわけですから。見つかった場合は殺されるか、強制的に部下にされます。普通は生まれながらに縄張りを持っているなんてありえないので、見つかる確立は低いんですけどね。

今回の場合、敵意を持っていない上に「仲間」を救っているの、見逃してもらえたのです。

本当は彼の陣地だった場所も一部千尋の物になってしまっているのですが、自治推奨な上に基本中の基本な命令しか出してないので、そのまま霧火としての体制を維持しています。さらに色々と千尋の策を盗んでいる事もあり、その奪われた一部を無理に取りかえそうという気はありません。

それだけでなく、魔物にとって前代未聞の政策に興味を持っていた霧火国の魔王様。むしろこれは好機とばかりに、姫様に付いてきたのです。

魔王見習い様と呪いの海辺町（1）（前書き）

※この小説にはあるネット用語が一つ紛れ込んでおります。
さあどれでしょう。

答えはあとがきで！

魔王見習い様と呪いの海辺町（1）

皆様こんにちは。 千尋です。

現在私は、適当に暇そうだった子供達を四人ほど連れ、ちょっと遠い所にある人間の町まで来ています。 他の子供達は、勇者さんおよび最初の四兄弟と長男さんに任せています。 勇者さんは渋っていました。 根気良く「お願い」していたら最後にはチクらないと約束してくれました。

ちなみに、私もこの子達もまだ、外出許可は出ておりません。 ばれれば大人達からの叱責および罰は免れないでしょう。 ですが、これはロマンなのでしょうがないんです。 前は出歩く事すらできなかったのですし、こんな動ける体を持ってしまったら：もうしょうがないとしか言いようがないでしょう。 しかも、今日は久しぶりに怒る大人達が全員ではらっています。 ドラゴンさんにいたっては、大陸の反対側まで買出しに行っています。

そう。 今日しか、ないんです。

まあ、そんなこんなで我らシャドウハンターズ（命名…アラクネ系の男の子さん）、今日も今日とて力を見せ付ける旅にれつつらごー！なのです。 とは言っても、ちょっと悪戯するだけなんですがね。

『主様、配置につきました！』

アラクネ系の男の子さんから報告が入りました。 ちょっと高い、まるで女の子のような声の子です。 そんな彼のコードネームはラ

クネさん。

ちなみに、報告は私の能力の一つであるカードを使っています。カードを生成して、こんな風に電話にしたり、物を入れて好きに取り出せるようにしたり、魔術を入れて誰でも使えるスクロールみたいにしたりと使い勝手が非常に良いので多用してます。

ただ、何かを入れる場合は、一枚につき一つのみなのでかさばります。その代わり、入れている状態だと、タロットカードのように簡略化された絵と名前が浮き出てくるので分別も簡単ですし、いちいち呪文を唱えたりしなくてもキーワードを言うなど発動条件を満たすだけで撃てるんです。 便利です。

閑話休題、彼の持ち場は住宅街です。糸をたらしして邪魔したり、ちよっとした影を落としたり、お留守番している子供を窓からちよっと驚かす役割を担っています。上半身は茶色の髪の普通の男の子ですが、下半身は普通にクモです。赤と黄色でちよっとグロいです。服はパンクっぽいとかなんというか、前衛的な物になってしまっています。

『主様、準備完了っす。』

この一見低くて落ち着いた声は、死霊系のカテラさん。中身は仲間内でもっともひょうきんなんですが、演技が上手で驚かしに関してはダントツ一位です。そんな彼の持ち場は、町の近くにあるのだっ広い運河の船着場。分裂も出来るので、やろうと思えば幽霊船だって一人で出来ちゃう実は優秀な子です。真っ黒でボロボロのローブに頬がこけた、土気色の顔をしています。元々は遠い国で死んだ子だったそうです。夢はいつか里帰りする事。

『主様、着きました。』

鈴が鳴るような声のこの子は、水精霊のシラさんです。厳密的には魔物ではないのですが、うちに住んでいる時点で私の配下なので問題はありません。持ち場は噴水やら水場全般です。彼女も物質的な体が無いので、分裂が可能ですからね。見た目は普通に全部が水で出来た女の子です。

『着いたよー。』

中性的な声のこの子は、影渡系のケゼンディアさん。ノリが良い、飄々としたかわい子ちゃんです。影渡というだけあって、影を伝って色んなところに行く事が出来ますし、影を使って攻撃や防御をします。実体はあったりなかったり。体自体が影で出来ていますので、通常では届かない所も余裕で触れます。

通常の見た目は人間のようで、短い銀髪に銀色の目、それにぶかぶかの漆黒のローブと同じ色のバンダナを頭に巻いています。ですが、歩く時は飛んでいます。面倒くさいからだそうです。鎖骨が見えるのが目に毒なんです、直してくれません。本体はたんなる真っ黒な影の固まりなんですがね。この子は珍しく、すでに名前を持っていらっしやいました。なぜかという人間から魔物になったマジリだからだそうです。姓名もあるそうですが、ヴァンなんとかしか覚えてません。持ち場は公園や建物の影などです。

「…宜しい。ならば、はじめよう…」

ちょっと雰囲気を出すために、低い声を出して開始を告げます。そのままふはははとか笑えれば一層ふいんき（↑なぜか変換でき

ない）が出るんでしょうが、さすがにそこまで夢中にはなれません。腐っても大人ですからね。ちなみに、私はどこを担当するのかというと、見張りついでに色んな所を回りますので基本的に一箇所には留まりません。

その後は、特に目立った事もなく、皆できゃっきゃうふふと真昼間から安心してゐる子供達を驚かしてきました。いやー、若返ったような気がしますね！ 年齢的にはまだ子供なんですけどね！

ついでに洞窟奥の真っ赤な温泉で汗を流し（最近脱衣所やらタオル置き場を作ったので、さらに快適になりました）、駄弁りながら城に帰った、のですが…

なぜだか怒り心頭のドラゴンさんが、玄関から走り出ようとしている所に出くわしました。

目が怖い、声が低い、顔がものすごい無表情と三連続で怒ってるアピールをしていらっやいます。

そして、その後ろでは、勇者さんが泣き崩れていらっやいました。

…ええ、怖いですよ。私も怖いです。でも、だからといって暴露しちゃうのはいかな物かと。

「…だいたいな、お前達はいつもいつも何を考えてるんだ？ 外は

危ないといっただろう、いくら縄張りの中だと言っても、自治させていると言っても！ 境越え自体は殆ど無制限だろう？！ 下手をすれば刺客も入ってきている可能性がある、いや絶対に入ってきているだろうな。 そいつらに見つかって殺されたり誘拐されたりしたらどうするつもりだったんだ！ まったく嫌な予感がして早めに帰ってきたから良いようなものの、万が一の事があったら：」

怒って饒舌になったドラゴンさんの説教を聴きながら、私達は頭をたれるしかなかったのです。

：私、雑魚にどうこうされるほどバカではないんですがね…。 まあ、そんなこんなで最近はずっと平和に暮らしております。

ただ一つ、海辺の町の一つが呪いに侵された事を除いては。

まあそれだけならよくある話なのですが、今回は誰にも解除できないそうなんです。 なんでも、壊そうとしてもカーテンを殴っているような気分になるし、解析しようとしても分厚い皮のような物に阻まれて無理だそう。

：呪いを解くには、呪いをかけた手法をリバース、解析及び解除、または破壊するの三つの方法があるのですが、リバースは聞き出しにくい限り無理ですし、基本的に魔物はちまちましたのが苦手なので破壊しか出来ないんですよ。

軽いトラップ程度ならそれごと壊せるドラゴンさんにすら解除でき

なかったと言うのは、おそらく隠蔽と幻惑系がふんだんに盛り込まれているでしょう。

しかし、人間の魔術師や魔術に造詣が深い者達を総動員しても解けない呪いとは、よっぽど誰かに強い恨みを持つていた上の事としか思えませぬ。その上、ここまで強力ならば：「呪術師本人が命を捧げた」工程を踏んでいるとしか思えませぬ。

：黒の歌ほどではありませんが、命を捧げられると本気でクソめんどくさ：厄介な呪いに変わるんですよね。リバースがほぼ不可能になりますし、命ってのはある意味ものすごい高性能高品質な電池そのものですから。

：と、いう訳で。一般の人間程度の器用さと集中力、そして魔族の力を持った私が解除しにいく破目になった訳です。

非常に気が重いですが、その代わりこの間の町下りの罰をキャンセルしてくれるそうです。正直言ってそろそろ腰にダメージが蓄積されてきていたので、一も二もなく飛びつきましたけどね！

魔王見習い様と呪いの海辺町（1）（後書き）

「黒の歌」は同時進行している小説でちよろつと説明しています。
くらいいいお話が苦手な人は、ご注意ください。..

<http://ncode.syosetu.com/n9620v/15/>

※答え..「ふいんき（↑なぜか変換できない）」

魔王見習い様と呪いの海辺町（2）（前書き）

ちよつとグロいです。

お食事中の方、ご注意をおねがいします。

魔王見習い様と呪いの海辺町（2）

皆様こんばんわ。 千尋です。 現在は夜なのですが、夜といえどもお星様とお月様がやんわりと申し訳なさそうに光っている熱帯夜です。

今、私は大きな猫型の魔物さんと一緒に、例の呪いがかけられたという町へ向かっています。 背中に乗ってハイヨーシルバー。 馬じゃないんですけどね。

長毛種なのですんごいもふもふのさらさらのぽかぽかのーで気持ち良いです。 ただ、少々ばかり暑いですが。 とうかものすごく暑いですが。 後でサマーカットにしてあげましょうかね。 そうそう、巷では、でかいのは怖いと言いますが、この子はでかすぎて逆にかわいいと思うんですよね。 それとも単なる親馬鹿でしょうか。

そんな事はおいといて、このスピードですとちやうど次の朝日が昇る頃にその町（ローラン港というそうで）に着くみたいです。 なので、現在ちよつと寝にくいですがおつきくてあったかい背中で寝ようとかんばっております。 両手両足を垂らすと、鞍気分を味わえるお得仕様…って何言ってるんですかね、私。

そういえば、彼女の大きさは普通の馬車ぐらいあるですよ。 普通なら大きくても人間程度らしいのですが、いったい何食ってこなくなったんでしょうね。 可愛いから問題はないんですが。

そんな事を考えているうちに、眠くなってきました。これは良い傾向です。あ、そうそう、姿は半竜のままです。呪いのせいで住民が全員逃げてしまっているのです、変化しなくとも良いと言われました。最近ようやく三時でいどなら人型を保てるようになったので、微妙に複雑な気分です。千尋悲しい。

本当はドラゴンさんがじきじきに着いて来たかったようなんですが、周りの町へのフォローなど別の仕事があって来れませんでした。私ってそんな信用ありませんか。ないんでしょうね。

その思考を最後に、私の意識はぷつぷつりと途切れました。おやすみなさい。

『主様』

『主様、起きて下さい』

「…ん？ ああ、着いたのか？」

『はい！』

ほめてほめてという気配を駄々洩れさせている猫さんを労いつつ目

を覚ました時には、ローラン港の全貌が臨める高い崖の上に到着していました。もう少々南のほうにある（つまり、キリビ国方面の）オルシア港は、隣接している三つの国からも近いし目立った障害もないのでかなり繁盛しているのですが、ここは山を削って作られているMS（マジックスポット、つまり魔力場ですね）なので、陸路は不便だわ所々に変な海流があるわ野生の魔物が定期的に戦争を仕掛けてくるわで腕に自信のある方や酔狂な方などしか船を入れません。

そのかわり、珍しいものや希少なものなども豊富に入荷するんですけどね。さらに、ここで魔具を作ったりすると質の高い物ができたり、ここで生まれ育った子供は魔力の保有力が通常より高くなったりとメリットも多いです。ですが、やはり物見感覚で来ると、良くて身包みを剥がされるだけで済むという、普通の女子供には非常にお勧めのできない街になってしまってるんです。

だけど、それも全部町の中だけで留まっているのが救いと言いましようか。一度腐りすぎた町を廃棄したんですけど、後味がとても悪かったんですよえ。伝染病まで流行っていたので仕方ないといえは仕方ないんですがねー。

：そんな赤い記憶は忘れて、眼前の青の現実を目を向けましょうか。ローラン港は、一言で言うと言いますね。ちょうど陸路の出口から見て、扇形にふわーんと広がっています。建物はいくつかの主要道路を除き、それはもう乱雑に立ち並んでおりごちゃごちゃした感じの町となっております。通常は高い所に住んでる人用に、空とぶ屋台みたいなのも飛んでるそうです。町の中心辺りにはなにやら塔がありますね、影になっていて良く分かりませんが。左部あたりには、でかいお屋敷がありますが、こっちもやはり朝日のせ

いで陰になっています。見える部分も多少はありますが、本来は全部真っ白な逆に目に痛い建物のはずです。

個々の色はさらに乱雑で（ここからでは良く分かりませんが）、町に下りると一色だけのがあったり、逆に極彩色が入り混じったのがあったりと見飽きません。しかも、別段規則とかは無いので、住人の気分によって町はその色を変えるそうです。他人の家に勝手に絵を書いたりして喧嘩になるって事件も良く聞きますね。

ただ、こんな乱雑だと、衛生面も投げやりだと思われがちですが、まったくもってそうではありません。なぜかというと、下水道や廃棄物などの規則は、私が出した「基本的な法律」に含まれているからなのです。理由としては疫病や伝染病を上げましたが、メインは私の「汚い所を歩きたくない」というわがままです。

だれの言葉だか忘れましたが、「慢心せずして何が王か。」ええ、まったくもってその通りですよ。これぐらいのわがままならば、むしろ喜んで迎えられるべきだと、私はそう思うのです。

さて、こんな所にずっといるのもあれなので、猫さんの背中を降りて二人でのてと坂道を下りました。近づくほどに呪いの臭みが強くなってきましたが、いまさら帰ることはできません。ああなんてジレンマ。

気分転換に猫さんをなでなでしてみます。

すりよってきました。さらに喉を鳴らされました。

可愛すぎるにも程があります。可愛さだけで生きていくつもりで

しょうか。むしろ養ってあげるからそのままの君でいてください。

いやしかし、臭い臭い。この時ばかりは自分の強さを恨みます。

…だけどこれでよく分かりました。この広範囲無差別系の呪いをかけた者は、自分の命を捧げています。この命が腐った臭いは、自分の気が晴れればどうでもいいという、悪意と利己的な考えに満ち満ちた魂にしか出せない臭いですから。

なんでそんな事が分かるかというところ、私は魔力の形が感覚として理解できるからなんですけどね。一定以上の強さになると、そんな事ができるようになるらしいです。他には音だったり味だったり熱い寒いだったり。私の場合が一番特化しているのが匂い方面なので、もっぱらそれに頼っています。

色々理由はありますが、とりあえず今は面倒くさいので説明はしません。ただ、上に書いてある通り、この呪いの術者はかける必要性に迫られたのでもなく、自分や何かを守るためにかけたのでもなく、かけたいからかけたという事、そしてそのせいでこんな腐りきった臭いが出てきてるという事だけ理解してくださいれば無問題です。

…ええ、猫さんがもう一步も動きたくないとばかりに足を踏ん張るくらいには、臭いのですよ。

仕方がないので戻させます。ついて行きたいんですが、巢の掃除をするのも主の務め。しょうがないので呪いの根本を探しにいくてくてくてく一人旅。なんて侘しい日なんでしょう。風は気持ちよく、海から登りかけている朝日は透き通りつつも肌を焼き、今日も鉄板の上で焼かれるような日々が始まる事を告げています。

そして背景でコンスタントに漂う鼻のひん曲がりそうな臭み。

今すぐ翼を広げてお家に帰りたいです。　…あ、そうそう、呪いの臭いに、呪い自体の内容は関係ありません。　えげつない呪いでも、爽やかな春の花畑のような香りをかもし出す物はあるっちゃあるの
で。

さてはて、町に着きました。　見た目的には綺麗で清潔かつ非常に目に負担をかける風景なだけなのですが、嗅覚的には最悪です。まさに最悪中の最悪、ゴミ貯めと形容する事すら恐れ多い、地獄ですらここよりはマシであろうと即座に理解できる香りが全てを覆っています。

そしてもちろん、臭いが一番酷いのは。

その、呪いの…　中　心　部　。

本能が拒否をしています。　そこに行くなど。　今ですら酷いのに、これ以上近づいたらどれだけ酷くなるか、考えても見ろ、と。　思わず遠い目をしてうふふと笑ってしまいました。　ああ、そのまま頭の中がお花畑のまんまでいてくれさえすれば！

未熟な私には、感覚で感知する能力をオンオフする…なんて事が出来るはずも無く。　哀れ、私は単身、この世の全ての酷い臭いを集め圧縮しまるで何千年も熟成させたような香りを醸し出している、呪いの本元に向かったのです。　（誰か止めて！）

…えー、皆様、非常に申し訳ありませんが、私…実家に帰らせていただいても宜しいでしょうか。

もうね。

言葉がね。

思いつかないくらいにね？ 酷いんです。

もうやだ…（泣）

まあそんな事を考えていても、事態は好転しないわけでした。こちらのほうが強いが故に、私は呪いの影響を受けませんが、…ええ、足元にはごろんごろんと沢山転がっていらっしやいます。 影響を受けちゃった方々が。

こういうの見ただけで鳥肌が立つんですよ、私…見たくないんです。でもね、中心部に向かっていくと、どんどん増えてくんですよ。たぶん、そこが一番影響力が強くて、逃げられなかった方が多いからだと思うんですけどね。

ええと、まあ状況を知りたいという方々に配慮して簡単に説明しますと、まず大小のできものがびつつつつしりと体中に出てきてる

でしょ。それからそれが潰れたのがなにやら酸性らしくて、皮膚に穴が開いたり、骨が見えていたり。皮膚がずるむけになって下の肉が見えていらっしやる方々も居ます。かなり気持ち悪いです。

腐っていたりして酷い臭い（現実）なので、吸い込まないようにマスクをハンカチで作りました。　：においつてね、その物体からはがれた極小の欠片なんですよ。　だから、腐った物の臭いを嗅ぐのって、食ってるのと同じだとか。　故に、酷い臭いの物は、出来るだけ吸い込まないほうがいいんですって。　排泄物の臭いも、菌とかがやばいそうです。

そんな事は置いといて、そのできもののほかに、なんか生えてきてもいます。　この：なんか、茶色の樹皮みたいですね。　それが頭を覆っています。　それから緑のツタ？　みたいなのがちよろっと。　髪の毛は食われているようです。　：うげっ、もにって動きましました。　生きてるようです、寄生先はすでに腐食していらっしやるというのに。

：いえ、寄生先の方も生きていますね、これは。　どうやら苗床として強制的に生き長らえさせられて、悲惨な事になっているようです。　すでに機能を果たして居なさそうな右目は同じく腐食していますが、左目は奇跡的に無事なようで、私が覗き込むとなぜか安堵の色を浮かべました。

：ん、なにやら口を動かしています。　小さい声ですが、聞き取れないほどではありませんね。　ええと……ええ、まあそういうだろうと思っていました。　私も同じ意見です。　彼女の望むとおりにしてやった後、手を合わせ、南無阿弥陀仏と唱えておきます。　こ

の世界に仏様がいらっしやるかどうかは分かりませんが、慈悲深い
お方ぞろいですので、何方様かが救いに来てくださるでしょう。

ついでに哀れな犠牲者さん方（後で全員手厚く葬ってあげましょう）
にさっき話した人と同じ処置を施しながら、中心部へとさらに歩を
進める私。片手間に出来るので、そんな身体的な負担はないんで
すが、精神的な負担が多いです。いくら今はもう魔物よりの思考
回路といえど、元々は人間でしたし。

ま、この呪いを解けば、苗床にされてるらしき皆様も無理やり生き
長らえさせられるって事もなくなるでしょうし。さっさと見える
範囲だけ処置して中心へ向かいましょう。さくつとね。

そんな事を言ってる間につきました。腐臭（もう臭いなんて言っ
てる場合じゃありません）は今までで最高に酷く、それを放ってい
るであろう物体もおぞましいと言って差支えがない物です。…で、
その物体なんですが…ええ、説明しなけりゃダメですか？ダメで
すかそうですか。

ええまあ、やさしく言ってですね…えー、まあ、呪いの中心部に
居た方々は、苗床ではなく、この物体を作る材料にされたらしく。
崖の上からはなにやら珍妙なオブジェにしか見えなかったのです
が、近くにきたら良く見えるようになりましたよ、ええ。

…体で作られた、非常に胸糞悪い、その塔が。

皮膚は融合し塔の外側を形作り、ほうぼうに顔が突き出ています。

中身は、骨も内臓も一緒にたにされて作っていると見ました。

たまに外側を破って飛び出してきてますし。　…でも、ねえ、皆様。

この塔で一番胸糞悪く、おぞましい事実って、なんだと思います？

…この、「材料」達。　生きてるんですよ、まだ。　この状態で。

まだ、声を出せるんです。　自分の状況を理解して…理解、でき
てしまっ、何も出来ない現実に絶望しているんです。　…そして、
叫んでいるんです。

ころして

ころして

だれか

おねがい

だれか

…こう、ずっと、ずっと。　叫んでいるんです。　さすがに吐きは
しませんでした、涙は出しました。　今もとまっております。

…ねえ、考えても見てくださいよ。　これだけの…ん、何人です
かね？　50人は容易に越えてますか。　これだけの方々が、私を

見つけたとたんに殺してくれと頼んでくるんですよ。…自分達はどう、助からないと。理解してしまっているんです。だから、せめて人の心を持ったまま、逝かせてくれと。…そして、殺す事でしたら救ってやれない、私の不甲斐なさが、どれほど私を苛んでいるか…。

…ドラゴンさん、多分、この事を言ったら私が行かないって事分かってたんでしょうね。だから、何も言わず、送り出したと。…くそっあの小賢しいとかg：いえなんでもありません。

とにかくとりあえず、術者にどんな事情があったにせよ…これはもう、許せる範囲を超えました。とりあえずこの塔は消滅させましょう。…そして、真ん中でぬくぬくと喜んでいらっしやる術者を引きずり出し…死は救いではない事をしっかりと叩き込んでやりますか。

死神が来ても、追いついてやりましても。こんな生きてる価値も必要もないゴミ、簡単に転生させて現世の罪を洗い流させるなんて事、許すものですか。今の私には、その力がふつふつと心の内から湧いてきていますもの、そんな事造作ありません。…ええ、私の所有物に手を出すほうが悪いんですからね？

私の巣に住む者は私の物。これは不変であり絶対の律。故に、それに手を出した物には…絶対の、罰を。ふふふ…たしか、とかg：ではなく、ドラゴンさんの知り合いに悪徳死霊術士がいらっしやいましたね。まずはそのお方に尋問を手伝っていただきましようか。

くっくっく…楽しくなってきました。
事からです。

…あ、まずは、呪いを解く

魔王見習い様と呪いの海辺町（2）（後書き）

千尋さんは相手を一定以上嫌いになると、生き物とは見なくなるようです。作者も、彼女がこんな性格だとは思ってなかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9100x/>

魔物が大人しくなった訳。

2011年12月19日11時55分発行